様式３

令和6年度　自 己 評 価 表

鳥取県立米子養護学校

【中長期目標（学校ビジョン）】

一人一人の能力を最大限に伸ばし、自立と社会参加に向けて、より豊かに生きる児童生徒を育成する。

※ キーワード 【コミュ力アップ（コミュニケーション力アップ）Lv.2】　めざせ！あいさつ世界一！！

【今年度の重点目標】

〇学ぶ意欲と自己肯定感を高める教育活動の展開

〇安全で安心な学校づくり

〇お互い認め合い、高め合う教職員集団の実現

〇表現力及び体力の向上、健康増進

〇家庭・地域との連携強化

〇業務改善の推進と組織の活性化

様式３

	年度当初					評価結果（９）月		
	評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
小学部	主体的な学びを促す取り組み	○児童が意欲的・主体的に取り組みながら、生活に汎化する力を培うための指導・支援の工夫	○学びを重ねることでできることが増えていくが、整えた状況の中だけでできることが多く、状況や支援が少しでも違うと不安になったりできていたことができないように感じてしまったりする児童がいる。また、自分で考えたり工夫したりする機会が少なく、教職員の評価に頼る児童もいる。 ○先生が好き、学校が好きと思えるよう日々の支援を心がける教職員が多い。反面、学ぶことに関しては児童の力をつけることに主眼を置くあまり、教職員から提示された活動をこなすことを中心とした授業になりがちである。	○保護者と情報を共有しながら児童に必要な力を模索し、学校生活だけでなく、家庭生活や地域生活の中でできるようになることを意識し、２つ以上できることを増やす。	○保護者との面談や連絡帳での聞き取り等を通じて現状を密に共有し、児童に必要な力と活用場面を明確にする。また、必要な場面で必要な指導・支援ができるよう、かかわる教職員で情報を共有する。 ○定期的な評価ができるよう、保護者と共に評価できる項目や機会を相談し、実施する。			
		○学ぶ楽しさを感じながら授業に向かい、児童の能力向上につながる授業づくり・改善の実践を行う		○児童が学ぶことが楽しいと感じる授業づくり・改善を行うことができたと答える教職員が８割を超えている。	○授業の評価は関わる教職員で定期的に行う。 ○研究部の授業実践と連携をとり、良い実践が次の授業づくりや改善に生かせるよう学習グループや学部会の機会を利用して声を掛け合う。 ○教職員が自らの指導や支援を振り返られるよう、学期ごとの教職員アンケートをとる。			
中学部		○生徒自身が考え、選択し、判断、表現できる学習活動や支援の工夫	○学習や活動に真面目に取り組んでいるが、受け身であったり声かけや指示を待っていたりする生徒が多い。 ○決まった型の質問には応じることができるが、自分の思いや考えを自由に伝えることには苦手意識がある。 ○あいさつをしようとする意識はあるが、促されないとできない場面も多い。 ○人との適切な距離が保てず、相手に不快感を与える関わりをしてしまいがちな場面がある。 ○人との関わりに苦手意識のある生徒がいる。	○学習活動や生活の中で、生徒が自分の考えや思いを選択したり表現したりしていると感じる教職員が８割を越えている。	○わかりやすい発問、思考を喚起する選択肢等による、わかる・楽しい授業づくりの工夫をする。 ○体験活動や調べ学習、実物に触れる学習等による、五感を刺激する授業や活動を工夫する。 ○振り返りの時間を確保する。			
		○人との関わり、社会との関わりを広げるための、コミュニケーション力、表現力の育成		○様々な場面で、生徒があいさつや返事、適切な言葉遣い等でコミュニケーションを取ろうとしている、仲間と協力していると感じる教職員が８割を越えている。	○「止まってあいさつ」「目を見てあいさつ」等、具体的なあいさつの仕方を指導する。 ○教職員自身の言葉遣いやあいさつを意識した関わりを行う。 ○仲間と協力して達成できる課題を設定する。 ○行事や活動を通した、他学部や地域の方々との交流の場を設定する。			
高等部		○卒業後の生活に必要な基本行動の確立を目指す	○経験が少なく、一般常識や社会生活で必要な知識の習得が十分でない。 ○自分なりの解釈で、できていると判断したり、逆にできていないと不安感を持ったりする生徒が多い。 ○何事にもまじめに取り組もうとするが、すぐにあきらめてしまいがちな生徒が多い。 ○様々な実態の生徒が多く在籍している。人との関わり方に課題があったり、一緒に何かをやりとげた経験が少なかったりする生徒が多い。	○生徒たちが高等部の目標「姿勢、あいさつ、時間、みだしなみ」を意識して生活できている。（生徒のアンケート教職員のアンケートどちらも達成率が８割を超えている）	○生徒が普段から意識できるよう、各教室に目標を掲示する。 ○生徒自身が意識して取り組めるよう、委員会活動や生徒会活動と連携して声掛けをしていく。 ○どの作業班も作業開始時や反省の時に「姿勢、あいさつ、時間、みだしなみ」についてチェックしたり、確認したりする時間を設ける。			
		○周囲の人と共に豊かに生きていく生徒の育成		○様々な人と関わりながら、自分の役割を意識して活動に取り組んでいる。（生徒のアンケート、教職員のアンケートでどちらも達成率が８割を超えている）	○人との関わりの中で、自分の役割を意識していけるよう、責任を果たしたり、やり切ったりした時の価値づけをする。 ○校内外の様々な人と関わる場面をつくる。 ○主体的に取り組む機会を多く持つ。 ○様々な場面で個人の力だけでなく、チームでつくりあげているということを伝えたり、人と関わりながら協力する活動を充実させたりする。			
全体	業務改善の推進と効率化	○時間外業務の削減	○個別の面談を実施し、時間の使い方を工夫する教職員も見られたが、月30時間を超える職員もおり継続して取組む必要がある。 ○時間外業務申請書による事前申請に取り組んだが、効果的ではなく他の取組が必	○時間外業務削減（前年比75%）	○月間時間外勤務30時間超の者に対する個別面談の実施（随時） ○ライトダウン（毎週水曜日18：30退勤）の徹底 ○教職員同士のコミュニケーションによる業務互助の推進 ○勤務簿（カンパニー）の自己管理			

評価基準　A：十分達成　B：概ね達成　C：変化の兆し　D：まだ不十分　E：目標・方策の見直し
〔100%〕　〔80%程度〕　〔60%程度〕　〔40%程度〕　〔30%以下〕

様式３

	年度当初					評価結果（９）月		
	評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
教務部	目的を明確にした諸帳簿の作成とＩＣＴ機器等の活用の推進	目的を明確にした諸帳簿の作成	○これまで個別の教育支援計画と個別の指導計画を通知表と兼ねていたが、今年度から別で作成することとした。特に個別の指導計画は、学校の計画としての要素と本人・保護者へ学習の成果を伝えるという要素が一緒になっており、それぞれの目的があいまいになっていた。今後、作成の目的を整理する必要がある。	○個別の教育支援計画、個別の指導計画、通知表の作成目的の違いを理解し、教育課程や年間指導計画とのつながりのある個別の指導計画が作成されている。	○諸帳簿の作成の目的を確認しながら、新様式での作成の仕方を説明する。 ○個別の指導計画は、知的の教科の考え方をもとに、教育課程や年間指導計画とつながりのある計画になるよう、目標設定や評価の時期に繰り返し伝える。			
		ＩＣＴ機器等の活用の推進	○昨年度の校内情報研修や情報発信等の取り組みから、教職員のＩＣＴ機器の操作、活用に関する知識能力は向上してきたが、ＩＣＴを有効に活用するための環境（機器の管理・情報共有・業務改善のためのシステム）の面で整備が必要な部分がある。	○教育活動、校務においてＩＣＴ機器を有効活用するための環境整備（機器の管理・情報共有・業務改善のためのシステムの整備等）、情報発信、提案が行われ、ＩＣＴ機器が活用されている。	○ＩＣＴ機器を活用しやすい環境整備（機器の管理・情報共有・業務改善のためのシステムの整備等）を行う。 ○授業や校務におけるクラウドサービス（Google Workspace for Education、Microsoft３６５）の有効活用を促進するための取り組みを行う。			
研究部	学校全体で取り組む校内研究	一貫性のある校内研究	○3ヶ年の校内研究の2年目である。昨年度は学部研究、実践報告会を通して、教科の見方・考え方を知ったり、他学部の取組を共有したりすることができた。 ○昨年度は実践報告会後に授業改善に向けた方向性を示すことができなかった。授業研究会のため、実践報告会のための研究という雰囲気もあり、研究を通して授業改善を進めていくことが課題である。	○学部研究、授業研究会、実践報告会の学びを、8割以上の職員が授業改善に生かしている。	○計画的に校内研究、学部研究を進める。 ○アドバイザー派遣事業等を活用して外部講師を招聘し、授業づくりや校内研究の助言をいただく。 ○研究テーマに沿った他校の取組や、授業改善の参考になる資料等を随時紹介していく。			
保健安全部	健康教育の充実と危機管理意識の向上	○健康課題（肥満・歯周病など）に対しての指導・支援の充実	○生活習慣アンケートから把握した児童生徒の健康実態や家庭の様子を指導、支援に生かしきれていない。 ○健康課題解決に向けて、保護者と連携しながら、組織的、継続的な取り組みが必要である。	○保護者や教職員が生活習慣を意識し、改善しようとしている。（研修会等の事後アンケート結果が８０％以上）	○児童生徒の健康実態や家庭の様子を把握するための生活習慣アンケートの実施と、アンケート結果の周知 ○歯と口の健康づくり事業の推進 ○保健だよりや食育だより、ホームページを活用した啓発 ○保護者連携や指導支援の充実を目指した研修会の実施			
		○防災・防犯（火災、地震、不審者等）に関する危機管理意識向上	○発生予測が難しい災害に対して、教職員一人一人の危機管理意識は高まってきているが、防災体制の整備及び充実を図る必要がある。 ○今年度20％程度が新着任教職員であり、防災体制の周知徹底が必要である。	○教職員の防災に対する危機管理意識が高まっている。（訓練等の事後アンケート結果が８０％以上）	○訓練後の教職員アンケートや外部専門家（消防署、警察署等）を生かした計画的な研修会、訓練等の実施 ○外部の専門家（消防署、警察署等）の助言を生かした、防災マニュアルの見直し			

様式３

生徒指導部	組織的・継続的な対応	○生徒指導上の諸問題への迅速かつ適切で組織的、継続的な対応	○昨年度は問題行動等の発生時には、迅速にいじめ対策委員会を実施したり、月に１回生徒指導不登校対策委員会を実施したりして、各事案に対して適切に対応を行ってきた。本年度、新たな部員が加わったので、改めて報告・連絡・相談・確認を徹底することを意識し、昨年度同様に情報共有に努める必要がある。いじめ対策委員会では、進め方を見直し、事案解決に向けての進め方が明確になるよう努めた。しかし、実際に進めてみると、進め方に迷うことがあったので、今後再確認や改善が必要と感じることがあった。	○生徒指導不登校対策委員会等で学部間の情報共有をし、大きな問題にならないよう迅速な対応で未然防止、早期発見、早期対応ができている。	○報告、連絡、相談、確認を徹底することを意識することと、委員会での情報共有はしっかりと行い、議論する内容をできるだけ絞り、必要があれば関係機関と連携し、迅速かつ適切な対応に努める。いじめ対策委員会では、進め方の再確認や改善を行い迅速な対応に努める。			
				○中学部単一３年生、高等部単一１年生全員の個人面談を実施して生徒の実態把握に努め、早期に諸問題を発見し指導や支援に生かしている。	○未然防止の観点でＳＣや教員による中学部単一３年生、高等部単一１年生全員の個人面談を実施し、生徒の実態把握に努める。その他の学年も必要に応じて実施していく。実施後、掴んだ情報をもとにカウンセリングの視点を持って、実施した生徒の指導や支援に生かしたり、引き続きカウンセリングを行ったりしていく。			
人権教育部	児童生徒及び教職員の人権意識の向上	○年間指導計画の運用と評価	○年間指導計画の改訂がされたばかりで活用しながら、加除修正が必要となること。 ○これまで指導計画等で児童生徒につけたい資質能力の記載は定着してきたが、授業を省みて評価するまでには至っていないこと。	○質の高い学習内容にするために、人権教育年間指導計画が有効に活用されている。有効に活用できたと回答する教員が８割に達する。	○つけたい資質能力の番号から、どんな力をつけることにつながるのか確認する。 ○各教科・領域とねらいを見比べ、教科領域等の特質を踏まえた学習内容かどうか判断する。 ○年計にある題材ごとに記録をつける。（○×△、コメント等） ○年計の活用についての研修を行う。			
進路指導部	家庭・地域との連携強化	○児童生徒、保護者のニーズにあった進路情報の提供	○教職員アンケートでは約８割が「本人、保護者と将来をイメージを共有できている」と回答。懇談や中高進路希望調査を機会に生徒自身が進路について考えたり、保護者と思いを共有したりすることができている。 ○保護者の約８割が「必要とする進路情報が提供されている」と感じている。一方、「進路担当だけでなく、担任も情報を持ち、懇談等で提供してほしい」との声も	○児童生徒・保護者のニーズに応じた進路情報や、各学部にタイムリーに必要な情報提供がどの教員もできる。（年度末アンケートで８５％以上が「できている」と回答）	○しんろだよりに返信欄を設けたり、個人面談・懇談で聞き取ったりして、児童生徒・保護者のニーズを把握する。また、個人懇談期間等に進路・支援センター室を解放し、自由に相談できる機会を設ける。 ○各学部の保護者向け進路懇談会の開催形態、内容等を工夫する。 ○各学部段階で必要な情報は何かを把握し、それに応じた職員研修を実施する。			

評価基準　A：十分達成　B：概ね達成　C：変化の兆し　D：まだ不十分　E：目標・方策の見直し
〔100%〕　〔80%程度〕　〔60%程度〕　〔40%程度〕　〔30%以下〕

様式３

	年　度　当　初					評価結果　（９）月		
	評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
教育支援部	校内外の教育支援の充実	○校内資源を活用した校外支援の充実 ○活用しやすい校内支援体制づくり	○自立活動の指導についての研修を希望される支援学級の担任の先生が多い。 ○地域の園や学校から「落ち着きがない」「運動が苦手」等についての相談が毎年多い。 ○「感覚が未発達」であることが課題につながる相談が増えている。 ○昨年度のアンケートで校内支援で実際に介入したことで効果があったと実感された先生は８割以上いた。しかし、校内支援での取り組みについての紹介は定期的にできなかった。 ○記録やストラテジーシートを活用して、問題行動の機能を分析したり、支援の仕方を共通理解したりすることができる先生が少しずつ増えてきている。	○教育相談を受けられたり研修に参加されたりした園や支援学級の先生方の７割が幼児児童生徒の変容を実感している。 ○校内情報サイトを通して、校内支援の取り組み事例や支援についての情報等を紹介、発信することで、教員の８割以上が参考になったと実感又は実践に取り入れているいる。	○地域の園・学校の職員を対象とした感覚の統合や発達に関する研修会を８月に実施する。 ○教育相談を通して、個の実態に応じた具体的な指導内容について一緒に考える。 ○研修に参加されたり、教育相談を受けられたりした園や学校に対し、継続的に連絡を取ったり年度末に聞き取りを実施したりする。 ○定期的に校内情報サイトに校内支援の取り組み事例を載せる。 ○取り組みの事例について分かりやすく活用しやすい紹介の仕方を工夫する。 ○年度末に、校内支援に関するアンケートを実施する。			
体力づくり推進部	体力の向上	○児童生徒の体力（特に柔軟性と全身持久力）の向上	○日常生活において、経験不足等により滑らかな動作が難しく、ぎこちなさや不器用さのある児童生徒が多くみられる。 ○瞬発的な動きはできるが、一定時間運動をし続けることが苦手な様子も見られる。 ○体力の向上を目指して、各学部で実態に応じた取り組みを行っているが、育てたい体力のイメージが不明瞭なところがある。	○児童生徒の柔軟性や全身持久力に関する記録や各種テスト等の結果が前年度より上がっている。	○児童生徒が楽しみながら取り組めるような柔軟性や全身持久力の向上を意図した活動について、実践例を紹介する。 ○児童生徒の体力の変容について、運動能力テスト等の結果や記録をもとに検証する。 ○体力づくり推進計画における「育てたい体力」とそれに対応する活動例の整理を行う。			
		○運動を楽しむ機会（体育的行事や生涯スポーツ活動等）の増加	○新しい体育的行事として、児童生徒が運動を楽しむことができるスポーツフェスティバルを計画している。児童生徒が実行委員として企画や運営に関わる場面を設定している。 ○障がい者スポーツ大会など、外部の大会に興味を持つ児童生徒・保護者が増えてきている。	○体育的行事や授業において、児童生徒が主体的に楽しみながら運動できるような活動を取り入れる。（年度末アンケート結果で７０％以上が「できた」と回答） ○外部大会やスポーツ教室等に新たに参加しようとする児童生徒が昨年より増えている。	○体育的行事等において、児童生徒が企画や運営に関わる場面を増やす。 ○遊びや授業の中で、楽しみながら運動に取り組める実践例を紹介する。 ○外部大会やスポーツ教室等への参加啓発を行う。			
表現活動推進部	表現力向上	○表現力向上の推進 ○表現できる場としての「けんべい祭」	○学校生活の様々な場面で児童生徒の表現力が向上するような学習活動を設定している。 ○昨年度のけんべい祭では、それぞれの学部、学習グループで工夫して、児童生徒が生き生きと発表することができた。	○児童生徒の表現する意欲、表現する力が向上する場面を、教職員が意識して設定している。（年度末アンケート結果が70％以上） ○けんべい祭で、児童生徒が学習の積み重ねの成果を生き生きと発表している。（事後アンケート結果が保護者、教職員の70％以上）	○けんべい祭をはじめ、児童生徒が学習の成果を発表する場を設定するよう教職員へ周知する。 ○けんべい祭のねらいや取り組みの視点を明確にする。 ○児童生徒の発表がよりよいものになるよう、リハーサル等を見合う会を設定する。			

様式３

事務部	安全で安心な学校づくり	○教育環境及び施設・設備の適切な管理	○施設・設備の老朽化による修繕の必要性または安心安全な教育環境の整備及び特色ある教育活動の支援のためにも中長期な計画策定が必要である。	○予算の効率化・重点化を推進し、健康や安全に配慮した教育環境の整備を図る。 ○児童生徒にとってよりよい環境づくり、児童生徒を中心にした教育環境の充実を図る。	○厳しい財政状況を踏まえ、徹底した経費節減に努め効率的な予算執行及び的確な予算要求によって中長期的に学校財務基盤を安定させる。 ○業務改善を図るとともに、職員組織への現状説明により計画的な予算執行に努める。 ○現状を把握・分析して、課題を整理し、優先順位をつけて業務に取り組む。 ○学校全体の動き（方向性）を見ながら業務に取り組む。			

評価基準　A：十分達成　B：概ね達成　C：変化の兆し　D：まだ不十分　E：目標・方策の見直し
〔100%〕　〔80%程度〕　〔60%程度〕　〔40%程度〕　〔30%以下〕